

# ハーフや外国人に対する差別

学校法人 北陸学園 北陸中学校

一年 北風一樹

私は中国人の母と日本人の父の間に生まれたハーフです。小学生のころ、私は「中国人」ということを理由に、いじめや嫌がらせを受けていました。顔立ちや性格が特別に変だからというわけではなく、当時の子供たちが持っていた「中国への悪いイメージ」が、私に重ねられていたのだと思います。教室でわざと避けられたり、話しかけても無視されたり、知らんぷりをされることがよくありました。本当はとても悔しいのに、それを言い返すこともできず、胸の奥に押し込めていました。

そのことを母に打ち明けたとき、母は「中国人とのハーフだからいじめられるんじゃないよ。あなたが優しすぎるから、何をしても許してくれると思われているんだよ」と言ってくれました。母は私を励まそうとして、嫌がらせを「ほめ言葉」に変えてくれたのです。その言葉を聞いたとき、少し心が軽くなり、自分を責めすぎなくていいのだと感じられました。

けれども、母自身もまた「外国籍」であるがゆえの差

別を受けたことがあります。ある日、家に塾の勧誘の男性がやってきました。勉強に役立つからとすすめられ、しばらく考えた私たちは、その塾に入ることに決めました。しかし契約を進めようとしたとき、その男性が母に「もしかして、奥さんは外国籍でしょうか？」と尋ねたのです。母が「はい」と答えると、男性は少し困った顔をして、「実は外国籍の方との契約は難しいのです」と口にしました。母が「外国籍という理由で契約できないのですか？」と問い返すと、その男性ははっとしたように表情を変え、その場で土下座して謝罪し、深く頭を下げたまま帰っていきました。

そのとき私は、「この人はわざと私たちを傷つけようとしたわけではないのかもしれない」と感じました。塾や会社の決まりごとが、外国籍の人を自然に排除してしまうような仕組みになっていて、それをそのまま伝えるしかなかったのだと思います。

人権の問題は、人の心だけではなく、社会のしくみにもかかわっています。「外国籍だから契約できない」という決まりは、誰かがわざと差別しようとして作ったものではなかったのかもしれない。でも、そのしくみのせいで、私や母のように悲しい思いをする人がいるのです。だからこそ、社会のしくみそのものを変えていかなければ

ばならないのだと思います。

外国人に対する差別は、ほかにもたくさんあります。日本語が少し違うだけで笑われたり、名前が外国風だというだけでからかわれたりすることもあります。大人の社会でも、就職や住む場所を探すときに「外国籍だから」と断られることがあると聞きました。こうした差別は、本人に悪意がなくても、社会の中で当たり前のように残っている仕組みや慣習のせいで起こってしまうのです。

私は、自分の体験を通じて「差別は特別な人の心の中にあるもの」ではないと気づきました。だれの心の中にも先入観や偏見は生まれるし、気づかないうちに人を傷つけてしまうこともあるからです。そして、それを支えてしまう社会のしくみも確かに存在します。だからこそ、一人ひとりが「それで本当にいいのか」と考え続けることが大切だと思います。

小学生のとき、私は悔しくて涙をこらえる日々を過ごしました。でも、母の言葉に救われ、自分の体験を作文に書いたり、友達に話したりすることで少しずつ前向きになれました。母が言ってくれた「優しすぎるからいじめられるんだよ」という言葉を、私は今でも胸にしまっています。あの言葉があったからこそ、私は人を責めるよりも、「なぜこんなことが起きるのか」を考えるように

なったのだと思います。

人権を守るということは、ただ「仲良くしよう」と声をかけるだけでは足りません。制度や慣習の中にある差別の芽を見つけ、それをなくしていく努力が必要です。そしてそれは、私のような体験をした人だけでなく、社会に生きるすべての人にかかわることです。

私はこれからも、自分の体験を忘れずに、差別に気づいたときには「それはおかしい」と声を上げられる人でありたいです。そして、国籍や文化の違いに関係なく、だれもが安心して学び、働き、暮らせる社会をつくるために、できることを考え続けていきたいと思っています。